# 公益財団法人日本バスケットボール協会
# ２０１２（平成２４）年度　事業報告

## Ⅰ　事業の概況

2012 年 4 月 1 日に公益財団法人へ移行し、2012 年度は移行後 1 年目の事業年度となった。尚、6 月に開始した定時評議員会にて役員改選をし、また、併せて組織変更を行って本格的な活動をスタートさせた。

2012 年度はロンドンオリンピックの開催年であり、女子は世界最終予選での出場権獲得を最大の目標としていたが、あと 1 歩で及ばず、残念ながらアテネ以来のオリンピック出場はならなかった。一方男子においては、中長期的な強化計画のもと、大学生を含む若手にシフトし、第 4 回 FIBA ASIA カップでは 2 位となった。

また、新リーグの設立に向けては、7 月に新リーグ運営本部を設置し、2013 年秋の NBL（National Basketball League）開幕に向けて具体的な準備を進めた。

さらに、2012 年度よりゼビオグループとのエグゼクティブパートナー契約を締結し、バスケットボールの普及、活性化を目指して、登録者向けのサービスの拡充、バスケキッズフェスティバルや 3X3（スリーバイスリー）の推進などの新たな取り組みを開始した。

## Ⅱ　事業内容

### １．競技力向上

#### （１）男子強化

日本代表チームにおいては、鈴木貴美一氏をヘッドコーチに選任し、2014 年以降のワールドカップ、オリンピックに向けて選手選考を行い、国内強化合宿、国内招待試合、ウィリアム・ジョーンズカップにて強化を図った。9 月の FIBA ASIA カップでは、決勝でイランに 2 点差で敗れたものの準優勝となり、一定の成果が見られた。また、U-18 日本代表は FIBA ASIA 選手権大会で 4 位に終わり、U-19 世界選手権の出場権獲得はならなかった。

＜主な国際大会と結果＞

| 大会 | 目標 | 結果 |
|---|---|---|
| 第 34 回ウィリアム・ジョーンズカップ | 優勝 | 6 位／9 チーム　（3 勝 5 敗） |
| 第 4 回 FIBA ASIA カップ | 3 位以上 | 2 位／10 チーム　（5 勝 2 敗） |
| 第 22 回 FIBA ASIA U-18 選手権大会 | 2 位以上 | 4 位／16 チーム　（4 勝 5 敗） |

#### （２）女子強化

ロンドンオリンピックの出場権を懸け、内海知秀氏をヘッドコーチに据えて総力を挙げて取り組んだが、オリンピック世界最終予選ではあと 1 歩のところで及ばず、2 大会振りのオリンピック出場は果たせなかった。

U-18 日本代表は FIBA ASIA 選手権大会で 2 位となり 2013 年の U-19 世界選手権の出場権を獲得した。また、U-17 日本代表は世界選手権で過去最高の 4 位という好成績を残した。

＜主な国際大会と結果＞

| 大会 | 目標 | 結果 |
|---|---|---|
| FIBA ロンドンオリンピック世界最終予選 | 5 位以上 | 敗退／12 チーム　（2 勝 3 敗） |
| 第 34 回ウィリアム・ジョーンズカップ | ― | 3 位／6 チーム　（3 勝 2 敗） |
| 第 21 回 FIBA ASIA U-18 女子選手権大会 | 優勝 | 2 位／12 チーム　（5 勝 2 敗） |
| 第 2 回 FIBA U-17 女子世界選手権大会 | ベスト 4 | 4 位／12 チーム　（5 勝 3 敗） |

（3）選手発掘・育成

カテゴリー別のブロックエンデバー、トップエンデバーを当初計画通り実施し、継続的な選手の発掘・育成を図った。

また、新たな取り組みとして男子の小 6～高 1 の長身者を対象とした「ジュニアエリートアカデミー」を実施し、体力面、心理面、技術面の向上を図った。

（4）情報戦略および医・科学サポート

男女日本代表チームや各カテゴリー代表チームの要望に応じて日本代表選手や対戦国の情報収集および分析を行った。

また、医科学においては、代表チームへのチームドクター、トレーナーの派遣、選手の健康管理やデータの蓄積を行った。その他、ジュニアエリートアカデミーにおいても成長段階にある選手の医学サポートを実施した。

2．競技会の開催

（1）国際大会

大田区総合体育館の開館記念事業として、チャイニーズ・タイペイ代表を招聘して男子日本代表戦を開催した。女子についてはオリンピック世界最終予選の壮行試合として、スロバキア代表との親善試合を栃木県小山市、東京都渋谷区にて計 3 試合行った。

また、公式戦としては「第 4 回 FIBA ASIA カップ」を招致し、9 月 14 日～22 日の間、大田区総合体育館にて開催した。

（2）国内大会

主催となる全国大会は当初計画通り開催した。尚、東京体育館の改修工事のため、ウインターカップは広島県立総合体育館（広島グリーンアリーナ）での開催となった。

3．講習会・研修会等の開催

（1）指導者

2011 年度に引き続き、JBL、WJBL、bj リーグのコーチ等多くの指導者の資格取得を

推進するため、JBA 公認 B 級コーチの専門科目講習会を 2 度開催した。
また、ブロック別に実施している全国コーチクリニックについては、九州および関東の 2 会場で開催した。

（2）審判
上級審判員の養成のため、A 級強化合宿、AA 級強化合宿、女性審判強化合宿、ヤングオフィシャルキャンプ等を実施した。
また、前年度に引き続き、国際審判員早期育成プロジェクトを立ち上げ、若手の早期育成を推進した。

4．普及
新規事業として小学生を対象とした「バスケキッズフェスティバル」を都道府県単位で実施し、2012 年度は 11 月の愛知県を皮切りに全国で 23 回開催、小学生、保護者、指導者含め延べ約 2,500 人が参加した。尚、実施にあたっては開催地との調整の時間的余裕がなく、都道府県協会との連携に一部課題を残した。
また、FIBA（国際バスケットボール連盟）が新たな競技種目として推進する 3X3（スリーバイスリー）について、次年度以降の国内での本格的な推進に向けた検討、準備を行った。

5．企画（マーケティング）事業
ゼビオグループとのエグゼクティブパートナー制度により、これまでとは大きく異なるマーケティングスキームの中、既存事業および新規事業に対する営業活動のより一層の推進を図り、新たな業種、企業との提携を実現した。
また、登録者向けのサービス向上の一貫として、新しく登録証（JBA ポイントカード）や JBA オフィシャルマガジン「TIP OFF」の発行等を行った。

6．国際対応
FIBA および FIBA ASIA の諸会議への役員派遣のほか、国内開催の国際大会への支援、代表チームの国際大会および海外遠征派遣に関する支援、各国協会との連絡窓口業務を行った。
また、若年層の国際移籍において FIBA の規定に違反する事案が生じ、その対処を行うとともに、国際ルールを遵守するため、周知、徹底を行った。
さらに、国際交渉力、地位の向上、国内での情報連携等に課題を残しており、次年度以降体制を見直し、国際対応の強化を図ることとした。

7．広報
日本代表活動や各種全国大会、国際大会等の情報発信および報道対応等を行った。また、JBA 公式ホームページのコンテンツの充実の他、新たなツールとして公式 LINE アカウントを開設し、情報発信の強化を図った。

８．資格認定および登録

審判ライセンス、指導者ライセンスについての認定および登録管理を行った。尚、チーム、競技者をはじめとした登録全般については、TeamJBA を利用して管理した。

チーム加盟数は前年より 138 チーム増加したが、競技者登録数は 1,674 名減少した。

＜登録数＞

| | |
|---|---|
| チーム | 34,154 チーム　〈前年比 100.4%〉 |
| 競技者 | 613,784 人　〈前年比　99.7%〉 |
| 審判 | 6,649 人　〈前年比 103.4%〉<br>（内、AA 級：80 人、A 級：209 人、公認：6,360 人） |
| コーチ | 11,813 人　〈前年比 112.2%〉<br>（内、A 級：139 人、B 級：267 人、C-1 級：114 人、C-2 級：3,942 人、D 級：7,002 人、E-1 級：292 人、E-2 級：57 人） |

９．競技規則の制定

FIBA のルール改訂「Official Basketball Rules2012」の発効に伴い、2013 年 4 月より国内で採用する競技規則、オフィシャルズ・マニュアルの製作を行った。

１０．出版物等販売

競技規則、オフィシャルズ・マニュアル等に加え、テクニカル委員会監修の指導者向け DVD を新たに制作、販売した。

１１．施設・用具の認定

ボールや器具の検定申請について、規格等の審査を行った上で認定を行った。

１２．味の素ナショナルトレーニングセンターの施設管理および活用

バスケットボール専用コートについて、日本代表等の合宿利用をはじめ、各チーム、団体、個人の利用調整、管理を行った。

１３．新リーグ

2010 年に設置した「新リーグ準備室」を発展的に解消、2012 年 7 月に「新リーグ運営本部」を組織し、2013 年秋に開幕する NBL（National Basketball League）に向けた具体的な準備に入った。尚、参加チームの公募の結果、NBL は 12 チームの 2 カンファレンス制、下部リーグとなる NBDL（National Basketball Development League）は 9 チーム 1 カンファレンス制にて行うこととなった。

１４．その他

（1）東日本大震災復興支援事業

前年度に引き続き、主催大会を東日本大震災復興支援事業として位置付け、募金活動等を実施した。また、加盟団体等から集められた募金もあわせ、被災地のバスケットボールの環境整備、普及、発展のため、岩手県、宮城県、福島県のバスケットボール協会に義援金を送った。

（２）環境活動

各種大会での啓発ポスターやバナーの掲示、ゴミの分別などの環境活動に取り組んだ。

## Ⅲ　組織運営および財務状況

公益財団法人としての新たなスタートにあたり、ガバナンス強化、オフィス機能の強化等に取り組み、2012 年 6 月の評議員会での役員改選後、一部組織形態を改め、業務執行にあたった。年間では計14回の理事会および3回の評議員会を開催し、法人としての運営を行った。

また、地域との連携強化および日本協会としての中央機能の役割を果たすため、前年度に引き続きブロック連絡会を開催するとともに、新たに都道府県協会理事長会議を開催した。

さらに、公益財団法人移行に伴い、規約類の整備、見直しも行い、組織運営の基本原則を定めた「基本規程」を新たに制定した。

財政面（収支計算書ベース）においては、収入面では登録料等の減があったものの、助成金や天皇杯・皇后杯の増収により、予算比 18,672 千円の収入増、支出面では、国際大会（FIBA ASIA カップ）の開催における大幅な収支の負担増や会議等の旅費交通費の増により予算比 99,236 千円の支出増となった。この結果、当期合計収支は予算比でマイナス 80,564 千円となり、前期繰越金との相殺後の次期繰越金は 229,575 千円となった。

尚、FIBA ASIA カップについては、JBA 主体にて実施したが、実施体制面等の問題があり、大幅な赤字（マイナス 91,000 千円）となった。これについては大いに反省し、速やかに検証を行って問題点および課題を明確にした。また、その上で次年度に向けて体制および業務執行の改善を進めた。